

利用者の状況

— 平成18年10月～平成25年6月までに終了した利用者について —



6. 帰結

	全体	失語等
家庭復帰	20(24.2)	9(36.0)
復学	2(2.4)	2(8.0)
就職	3(3.6)	1(4.0)
職場復帰	7(8.4)	1(4.0)
就労移行支援への移行(国リハ)	34(41.0)	7(28.0)
職リハへ移行	7(8.4)	1(4.0)
他の職業能力開発校へ移行	2(2.4)	0
その他の施設	4(4.8)	1(4.0)
中途解約	4(4.8)	3(12.0)
計	83(100.0)	25(100.0)

就労継続
B型等へ

<移行後>
就労
職リハ
B型等へ

生活介護

<原因>
体力
意欲
支援体制

※訓練終了者の平均利用日数



全体:256日

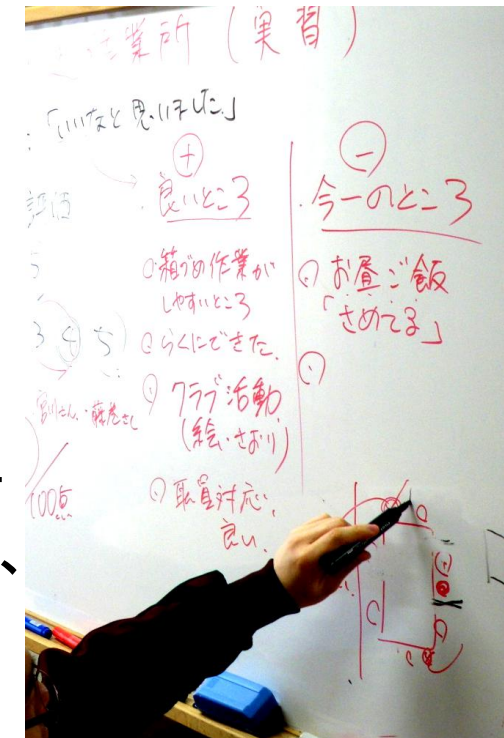
失語等:328日

「話す」ことへの支援

- 本人の生活を知り、伝えたいことを予測
- 経験や趣味に即した話題からコミュニケーション意欲を引き出し地図やカレンダー、絵辞典などを用いて他者とのコミュニケーションの機会を作る
- 個別に、各場面で使用しやすいツールを選択（カード、携帯電話、メモ帳、コミュニケーションノート、磁気・ホワイトボード等）
- 「はい」「いいえ」で答えられる質問と明確な選択肢の提示

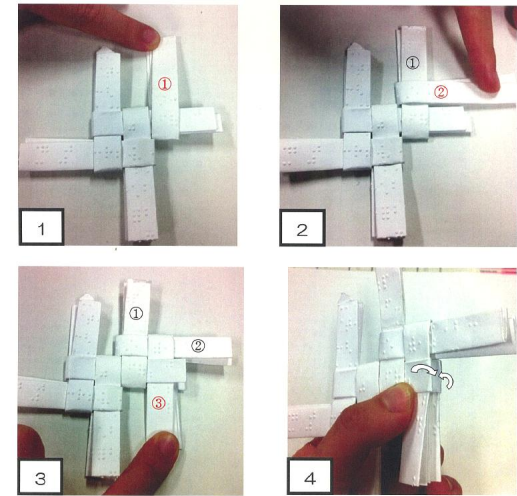
「聞く」ことへの支援

- 必要な情報を整理してひとつずつゆっくり、具体的に
- 聴覚的理解を補うための視覚的情報（絵や図、写真、見本など）の提示、メモなどの文字情報を併用する



「読む」ことへの支援

- 漢字による意味理解が良好な場合が多い
- 実物・写真・図・絵を用いた指示や手順書
- 音声情報(聞く)が加わると理解が深まることもある

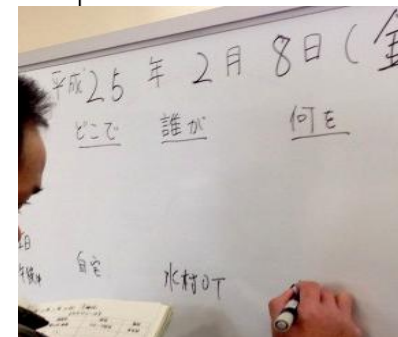
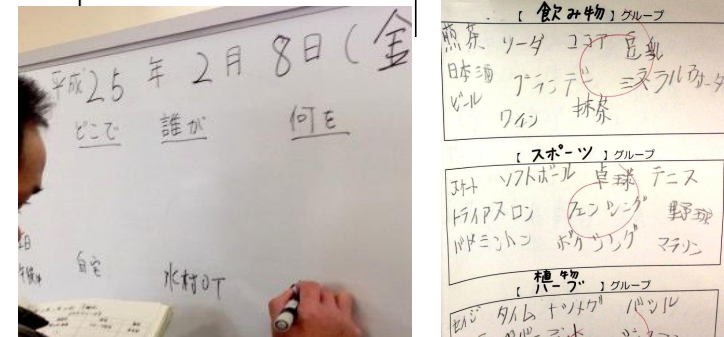


「書く」ことへの支援

- 個々に様式を工夫し、読解が良好な場合は写し書きから書くことに慣れる
- 連絡先やプロフィール、緊急時の対処などの情報は、メモ等で参照できるようにする
- 仮名理解が良い場合は50音表や辞書を使用できることも
- パソコン入力が必要な場合は、仮名入力やルビ機能、手書きパッド、音声読み上げソフト等を検討

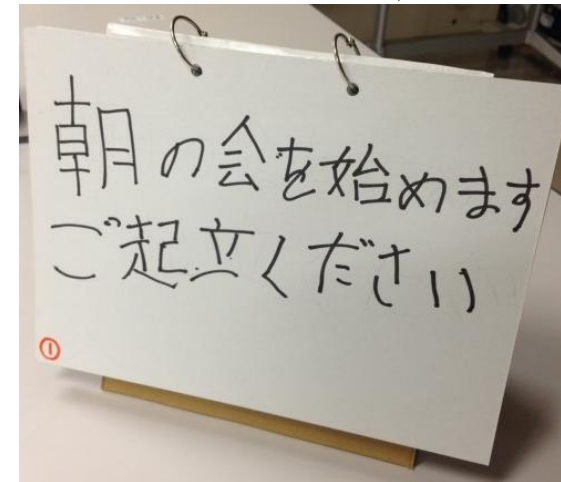
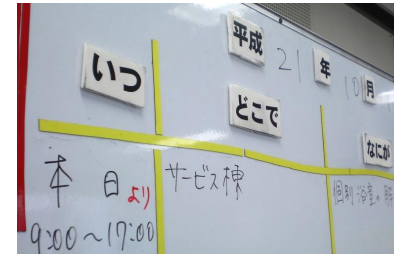
栽培記録表

作物名	平成 年 月 日()		
日付	平成	年	月 日()
天候			記入者
【作業内容】	水やり ・ 追肥 ・ 草取り 種まき ・ 苗植え ・ 植え替え 支柱立て ・ その他 ()		【スケッチ・写真】
【生育状況・気づいたこと】			



その他の支援のポイント

- 得意な部分(読む、聞く、書く、話す)を用いて、生活や職場等の各場面に応じた代償手段の確立を目指す
- 以前の経験や趣味と関連する馴染みのある話題や、作業活動(構造化されたプログラムや創作活動、非言語的コミュニケーションを活用したグループワーク等)により、表出を促す
- 携帯やスマホ等、家族や支援者との遠隔の連絡方法を早期に確立



- 本人のコミュニケーション能力を家族がどのように捉えているか把握
- 就労に際しては、指示方法や手順書の具体化「数える」練習、作業の強みを引き出し伸ばす支援を
- ツールの使用に消極的な場合は、機能訓練を並行しながら、「うまくいく」経験を積み重ねる

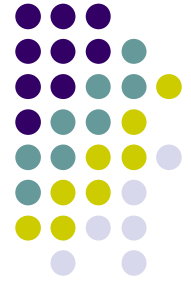
高次脳機能障害の方への支援①



- 訓練参加による生活リズムの確立、体力及び耐久性の向上を図る。
- 健康管理では、薬の仕分けや保管方法の工夫、体調不良の場合の訴えが可能か、どのような状況下で疲労するかなどを観察し、自己管理の方法を具体化する。
- 集団訓練によりコミュニケーションの機会を増やし、対人技能の柔軟性を図る。
- 易怒性や突発的な行動には介入し、その場を離れ落ち着いてからフィードバックを行う。
- 体験的気づきにより、障害の自己理解を進める。
- 多様な目的に応じた訓練内容を提供する。



高次脳機能障害の方への支援②



- 家族と日々の訓練状況を共有しながら、共に前進する。
- 本人の障害特性と強みを念頭におき、進路先とのマッチングを図る。
- 地域支援者との連携を早期から意識し、連続した支援体制を築く。
- アウトリーチは必須、自宅、地域、学校、職場、就労先に出向き、訪問訓練、実習、リハビリり入社などのチャンスを活かす。
- 人を含めた環境調整が重要。

